

Death Leaves No Card
1939
by Miles Burton

目次

素性を明かさぬ死

5

訳者あとがき 236

解説 塚田よしと 240

主要登場人物

- バジル・メープルウッド……………ヒザリング邸の若主人
フィービ・メープルウッド……………バジルの妹
ジェフリー・メープルウッド……………バジルの叔父。リヴァーバンク邸および〈旦那さまの別荘〉の主人
モニカ・メープルウッド……………バジルの叔母。ジェフリーの姉
ルーベン・デュークス……………フォアストル農場の管理人
エミリー・デュークス……………ルーベンの妻
ヘティ・デュークス……………ルーベンとエミリーの娘
アーネスト・ペリング……………ジェフリーの元共同経営者
ラストウイク……………メープルウッド家の顧問弁護士
プレスコット……………テナタリッジ村在住の医師
トム・バラップ……………ガソリンスタンドのあるじ
ハロルド・スワンリー……………自動車販売店のあるじ
アーノルド……………スコットランドヤードロンドン警視庁の警部
ガーランド……………アドルフフォード警察署の警視
ウエルチ……………ガーランドの友人
テリー……………アドルフフォード警察署の巡査
ランバート……………アドルフフォード警察署の巡査

素性を明かさぬ死

第一章

ルーベン・デュークスはドアと戸枠の隙間にボールをこじ入れ、ぐいと力を込めた。ドアが開いて浴室内があらわになると、全員が押し黙った。次の瞬間ヘティ・デュークスのつんざくような悲鳴が響きわたり、その母親が「神さま！」と低く叫んだ。

ルーベンはためらわず足を踏み入れ、タオル掛けのバスタオルを掴み取って裸身の上へ投げかけると、階段の下り口の前に立ちすくむふたりの女へ向き直った。

「おまえたちはキッチンへ行っている」鋭く命じた。「わしと旦那さまでなんとかする。手が足りるときは呼ぶから」

妻と娘の足音が階下へ去るのを待って、ルーベンは主人へ探りの目を向けた。そもそも十分前のあのときから、いやな予感はしていた——なにやら尋常ではないことが起こったと。ヘティが息を切らして牛小屋へ駆けこんできて、バジルさまが浴室で気を失っている、ドアを開けようとしたが開けられないと訴えた。気を失っている、か！ 顔だけを見れば、たしかにそう見える。いっぽう主人の焦点のぼやけた近眼の目からは、心細げな狼狽の色しか読みとれなかった。

ジェフリー・メープルウッド氏の身なりは、整っているとは言いがたかった。足元は毛皮裏のついた寢室用スリッパ、紫色の絹のガウンの下は淡い緑のパジャマ。まだひげも剃っておらず、青白くこ

けた頬や引っこんだ顎が影に覆われたように黒ずんでいる。ふだん入念に整えている黒髪は、こっけいなほど乱れて、いく筋もの房になって広い額に垂れかかっている。農場の管理人の視線に気づいて、何か言おうと口を開けたものの、結局またつぐんでしまった。

ルーベンは何も言わなかった。どう考えてもまずい事態だ。

「すぐに医者を呼びましょう、旦那さま」ぴしゃりと言った。

とたんにジェフリー・メープルウッドは、弾かれたように喋りだした。「そうそう、医者だ、そうしよう。いや待てよ、あの医者はなんというんだっけか。ほとんど会ったことがないんだ。とても理解できん、こんなことは。バジルはずっと、元氣すぎるくらい元氣だった。こんなこと、いまま一度だっけなかつた」

けれどもルーベンは、もはや聞いていなかった。廊下を横切つて階段の下り口に立ち、手すりから身を乗り出して声を張りあげる。「ヘティー！」

娘はそばにいたらしく、すぐに応答が返ってきた。

「急いで農場へ戻つて、プレスコット先生へ電話をかけてこい。旦那さまの甥御さんが急にお加減を悪くしたから、すぐに来てくれと言うんだ。さあ、走れ！」

ヘティーが駆けていき、ボタンと勝手口の閉まる音が響いた。浴室へとつて返したルーベンは、ぴくりとも動かない身体を沈んだ目で見おろした。肩先から上だけが、バスタオルの死装束から突き出ている。

「先生が来る前に、バジルさまを寢室へお運びしませんか」そう言った。「あんな格好のままにしと
いちゃ、あんまりお気の毒です」

「ああ、うん、もちろんだ」主人の返事は上の空だった。「そうだな、寝室へ運んでやろう。バジルの寝室は廊下の突き当たりだ。われわれふたりで運べるだろうか、デュークス？」

「わしだけで大丈夫です」ルーベンは答えた。テンタリッジ村、すなわち近隣数マイルにわたって、この男ほどの力持ちはいないことは誰もが認めるところだ。ルーベンは浴室へ入って、遠慮がちにバスタオルをめぐった。このままにしておくのは気の毒だと、彼が考えたのも無理はない。というのもバジル青年は、なんとも異様な体勢で床に倒れていたからだ。右半身を下にして、右脚を窮屈そうにくの字に曲げている。左脚は珙瑯ほうろう引きのバスタブの縁に、これまたくの字に引っかけたような形で、足首まで湯のなかに浸かっていた。

腿の下に片腕を差し入れ、もう片腕で背中を支えて、ルーベンは苦もなく荷物を抱え上げた。本人の部屋へ運び入れ、そっとベッドに横たえてシートで覆い隠してやる。それから静かに、だが決然とドアを閉めた。ジェフリー・メープルウッド氏の姿は見当たらなかった。おおかた自分の寝室に引っこんだのだろう、部屋のドアが閉じている。ルーベンは開けたままのドアから浴室内を一瞥すると、階段を下りて妻のいるキッチンへ向かった。

夫が入ってくると、エミリー・デュークスはぎくりとして顔を上げた。「まあ、ルーベン！」と叫ぶ。「いままで何をしていたの？ バジルさまのご看病だとか、わたしがやれることはないの？」

ルーベンはかぶりを振り、「ないよ。医者でもどうにもならん」と言った。「いいかね、よく聞きなさい。わしが見たとき、バジルさまはもう息をしとらんかった」

「なんですって！」デュークス夫人は叫んだ。「いいえ、そんなことがあるもんですか。ほんの半時間前、あんなにお元気だったのに」

ルーベンは片手を挙げ、妻を制した。「騒ぐんじゃない、母さん。いいから大人しくしているんだ。バジルさまが亡くなろうと、わしらには何も関係ない。みなへあれこれ説明するのは、旦那さまのなさることだ。かえってわしらは、よけいな首を突っこまんほうがいい」

けれども夫人は引き下がらなかつた。「そう言うのはけつこうだけど、わたしたちだっているいろいろ訊かれるにきまつてるわ。そうでしょ？ だいたいわたしがお茶を運んだときには、お元氣そのものだったのよ」

ルーベンは肩をすくめた。「かもしれんが、もう元氣じゃないんだよ。ところでヘティのやつはどうした？ まだ戻ってこないのか」

「戻ってきたわ、いま」勝手口の外から軽やかな足音が聞こえてきたので、夫人は答えた。ほどなくヘティが、息を切らしながらも潑刺はつらつとした様子でキッチンへ飛びこんできた。

「お医者さまと直接話をしたわ」ヘティは言った。「すぐに車を出して、十分以内にここへいらつしやるって」

夫人は時計をちらりと見た。「九時を回ったばかりだものね。日曜の朝は、十時まで診療がないはずよ」

ルーベンは鼻を鳴らした。「診療だってー」と吐き捨てる。「くじいた手首にヨードチンキを塗ったくるのなんぞ、あと回しでかまわんだろ。こここの階上うへでは——」いさめるような妻の視線を感じて、急いで口をつぐむ。

だがヘティは、父親の言葉の意味に気づかなかつた。「ねえ、バジルさまはそんなにお悪いの？」
「わしにわかるもんかね、そんなこと」ルーベンはぶつきらぼうに言った。「どれだけお悪いかを調

べるのは、プレスコット先生のお役目だ。そのために呼んだんだから」

キッチンに沈黙が落ちた。しんと静まり返ったなかで唯一、デュークス夫人がのろのろと、やらなくともいい調理の続きをする音だけが響いていた。この朝食をどうすればいいのかしら、と夫人は思った。こんなことになってしまつては、誰かの口に入ることもないだろう。腕によりをかけたから、どうしても惜しい気持ちが強くなる。干し鱈たらのミルク煮に、ソーセージとベーコン。とうとう夫人はあきらめ顔で、ガスコンロからジュージュー鳴っているフライパンを下ろすと、テーブルの上に置いた。

時計の針の動きが、めつたやたらに遅かつた。しかしついに、じつと耳をすましていたルーベンが車の近づく音を聞きつけた。「来たぞ、先生だ。ヘティ、いい子だから急いで玄関を開けておいで」

門の前で車が停まり、プレスコット医師が鞆をさげて玄関へ姿を見せた。まだ若手といつてよく、小柄で細身ながら筋肉はしっかりとついでおり、灰色の目は厳しく光っていた。「さきほどはどうも、お嬢さん」きびきびと言う。「患者の方はどちらです？」

医師の声を聞きつけ、ルーベンもキッチンから出てきた。「わしが案内しましょう。入ってください
い

「おや、デュークスさんまで来ていたんですか」医師は少し驚いた顔をした。「わかりました、お願いします」

ふたりが階段を上ると、ドアの一つが開いてジェフリー・メープルウッドが顔を出した。まだ着替える途中で、ワイシャツ姿でひげも剃つておらず、髪もとかしていない。けれども眼鏡だけはかけており、医師の見分けはついたようだった。

「おはよう。来てもらって助かるよ。ええと——」

医師があとを引きとった。「プレスコットです。甥御さんがお加減を悪くされたとか」

「そうなんだ、まったくわけがわからんよ。浴室で気を失ったんだ。こんなことは、以前に一度もなかったのに。しかもドアに鍵がかかっていて、どうにもならんからデュークスを呼びにやったんだ。デュークスを来させなかつたら、浴室に入ることもできなかつただろうな」

プレスコット医師は、いささかしびれを切らしたようにうなずいた。「そうですね、そのお話はまたあとで。まずは甥御さんを診たいのですが」

ルーベンが両者のやりとりにつけりをつけた。「こつちです、先生」廊下を進み、奥の寢室のドアを開ける。「ここです」

医師が寢室に入ると、すかさずルーベンも入ってドアを閉めた。プレスコットはベッドへ近寄り、シーツを取り去った。そのまま眉間に皺を寄せて数秒ほど黙りこくっていたが、やがて振り向き、咎めるような目をルーベンへ向けた。「この方はもう、息がないですよ」

ルーベンはたじろがず、まっすぐに医者を見つめ返した。「そうだろうとは思っていましたよ。浴室からここまでお運びしたものでね」

「わかりました、では部屋を出てもらえますか。廊下で見張っていてください。わたしが見に行くまで、誰も浴室に立ち入らせないように」

たつぷり十分以上も経ち、ようやく医師は部屋から出てきた。ルーベンは浴室の見張りをしており、ジェフリー・メープルウッド氏の寢室のドアは再び閉じられ、中で動きまわる音が聞こえていた。医師はしばしそちらへ耳を傾けたのち、だしぬけにルーベンに話しかけた。「亡くなった方のお名前

は？」

「バジル・メープルウッドさまです。旦那さまの甥御さんですが、このへんのお方じゃありません。ステイプルマウス近くの、ヒザリング邸というところにお住まいだとか」

「ここにはいつから？」

「昨日の午後に着きなされたばかりですよ。旦那さまとご一緒に」

「ここの〈別荘〉に電灯はないんでしょうね？」

「ないですな。二、三年前に旦那さまが、キャラーガス（家庭用の液化ブタンガス）のボンベを置きましたが。その前にはランプを使っていました」

「電話は？」

「ありません。旦那さまはいつも、農場の電話を使っておられます」

「ラジオは？」

「それもないです。旦那さまがお嫌いだとかで」

「そうですね。たしかあなたが、遺体を浴室から運び出したんですかね」

「はい。旦那さまに呼ばれましたよ。ドアをこじ開けるとのこと、ボールを持ってきて——」

「そのへんの説明はいいですよ、いまのところ。発見したとき、遺体はどのように倒れていたんですか？ やってみてください」

ルーベン は仕方なく浴室の床に寝そべり、さきほどのバジル・メープルウッドと同じ体勢をとつてみせた。「こんな感じでしたよ」

「左脚はバスタブの縁に引っかかっていたんですね？ まちがいなく？」

「まちがいないです。足首が湯に浸かっとなりましたから」

プレスコットは湯に手を浸してみた。まだ温もりが残っていた。少しも濁っておらず、石鹸のかす一つ浮いていない。置かれたものにはいっさい触れないようにしながら、浴室内を丹念に見て回った。そうこうするうち、ジェフリー・メープルウッド氏がひよっこり姿を現わした。剃刀とタオルを手にしている。浴室の洗面台でひげを剃りに来たようだ。

けれどもプレスコットは、その前に立ちふさがった。「ここには入らないほうが賢明ですよ、メープルウッドさん」静かに続ける。「むしろみなさん、〈別荘〉を出ていたほうがいいと思います、きちんと調べがつくまでは。どうも妙なところがありますので」

「なんと、それはまた厄介だな」メープルウッドは言った。「ところで、甥のバジルはどうしたね？もう正気づかせてくれたんだろ？」

医師はその目をまっすぐに見つめ、単刀直入に告げた。「甥御さんは亡くなりました」

メープルウッド氏の手から剃刀がすべり落ち、カチャンと床で音を立てた。「亡くなった？」おうむ返しに言う。「亡くなったって？」プレスコットの視線を受け、しきりに眼鏡の奥の目をしばたたく。「信じられん。浴室へ向かうときには、口笛を吹いていたんだぞ。どうして死んだというんだ？」「それは、検死審問で判断すべきことです」医師の声はやはり静かだった。「ご理解いただけと思いますが、わたしは職務上、この件を通報しなければなりません。それからもう一度忠告しますが、みなさん〈別荘〉を出るべきです。それもただちに」

メープルウッド氏は、おびえた様子で浴室の入口から身を引いた。「危険だということのかね？」

「ええ。かなり」プレスコットは淡々と答えた。